

北陸における風鎮祈願にまつわる行事とその由来

田上 善夫

(2000年10月20日受理)

Folkways of Wind Festival in Hokuriku District and their Origin

Yoshio TAGAMI

E-mail : tagami@edu.toyama-u.ac.jp

Abstract

There are many manners and customs in the ceremony to pray pro-calm rogation. Crops, special sickles and traditional plays are dedicated in the wind festivals in Hokuriku District. Some unique constructions of shrine may be related to the folkways of wind festival in Toyama Prefecture. Their origin is investigated in relation to the two major wind gods, Suwa and Tatsuta. As the results, it is estimated that the ceremony and festival of wind has in most cases progressed from the folkways of the local groups in strong wind areas.

キーワード : 北陸, 富山, 風, 風祭, 鎌, 諏訪, 龍田

Key words : Hokuriku, Toyama, Wind, Wind festival, Sickle, Suwa, Tatsuta

I はじめに

富山平野南部の婦負郡八尾町では、毎年9月初めの「おわら風の盆」で、歌と演奏にあわせておわらが踊られる。八尾町南部の大長谷付近ではかつて、9月1日から3日間をフカンド（不吹堂）の祭りといって仕事を休み、赤飯や鱈鮎、素麺を食べ、墓参りをし、ニワカ（俄）などを演じ、バンドリを着て町を歩いたという。八尾の町でも、風の神を祀り風害のないことを祈るのは不吹堂や風宮であり、後にこうした行事に間名寺が関係し、さらに風の盆として越中おわらが行われるようになった（三隅治雄，1989）。

富山平野南部だけでなく砺波平野南部などの強

風地域には、不吹堂や風宮が祭られ、風の盆や風祭が行われている（田上善夫，2000a）。ひとたび強風に見舞われれば農作物への被害は避けがたく、それから免れようとする祈願はさらに全国各地にみられる。ただし祭祀は地域によりさまざまで、風鎮に際して鎌打ち神事などが行われるところもある。同時に風鎮の祭の呼称もさまざまである（田上善夫，2000b）。

風鎮祈願に際しておこなわれるさまざまな神事や奉納行事などは、より広域でも地域的に連続したり、類似したりしている。強風地域においては、偏形した樹木や、屋敷林・防風林などが作られたりするが、風の祭祀には強風のほかに、さらにその地域の文化、社会、歴史などのさまざまな背景

が影響する。そのため他の民俗行事や民俗芸能などがそうであるように、風の祭祀はきわめて多様である。また現在祭祀がおこなわれているにせよ、その由緒や今日に至る経緯も明らかでないことが多い。

こうした各地に現在も引き継がれている風鎮行事はさまざまであるとはいえ、地域的にはまとまりがみられることが多い。それは風鎮めを祈願する背景には強風災害の危険性が潜在しており、行事の分布はそうした地域の自然的基盤に依存するためと考えられる。また風鎮行事も、地域で行われる祭祀の一環であるために、他の信仰圏ないし文化圏と深く関わるためと考えられる。

そのため各地の風鎮行事の地域的な類似性を明らかにすることは、風鎮行事のみならず自然的基盤や社会的背景などとの関わりを捉えることにつながる。そのためとくにさまざまな風鎮行事に共通する様式などに注目して、それらの広がる範囲を明らかにしていく。こうした地域における風鎮行事の特色の整理は、その由来や意味の理解につながるものと考えられる。それにより地域の自然的基盤の認知とそれへの対応、さらにそこから形成される風上の解明を試みる。

II 調査地域と調査方法

風祭は全国各地にみられる。その中でフェーンを伴う強風など、地域的な共通性の高い北陸地方を主要な対象地域とする。さらに風鎮行事に限らず祭祀に強い影響力をもつ近畿地方についても関連して調査する(図1)。

風鎮行事は現地での実際の調査を基本として進める。ただし、多くは年に1度の祭りとして行われるために、それらを見聞することは困難である。そのため、個々の報告も援用して調査を進める。

III 北陸における風鎮行事

1. 富山県の風鎮行事と立石

富山県では、風鎮の行事の多くは、6月あるいは7月に行われる。また8月の盂蘭盆の後にも風鎮の祭りが行われる。下新川郡宇奈月町では、16

日は寝盆、17日は雨の盆、21日は風の盆である(宇奈月町史編纂委員会、1969)。黒部川の下流側の下新川郡入善町では、23日が風の盆である(漆間元三、1974)。18日を風の盆とするところも多く、盆の納め日の意味がある(三隅治雄、1989)。

富山市付近では、休みをボンと称することが多い。9月1日には団子や黄粉のぼた餅を作って祝う(三隅治雄、1989)。八尾では現在は、9月1～3日に風の盆が催される。元禄年間に臨時の祝事として行っためぐり盆が始まりといわれ、後に旧暦七月の盂蘭盆となり、近代に入って二百十日の風祭盆となったという(友尾豊、1998)。

そうした風鎮祭の一つとして、上新川郡大山町下双嶺で風神祭が行われる(田上善夫、2000b)。平成12年も例年と同じく、7月15日の13:00～14:30に風神祭が斎行された。神職1人、氏子4人、崇敬人3人の参加がある。この不吹堂はかつて野ざらしであったが、昭和23年に杉皮で葺き瓦をのせた建物ができた。平成12年には畳が入れられた。

この不吹堂に集まるのは夏祭りである「不吹堂祭り」のときで、これには氏子だけでなくいろいろの人が来る。春祭りのときには、下双嶺のほか荒屋敷や大清水など付近一帯の神社が合祀された

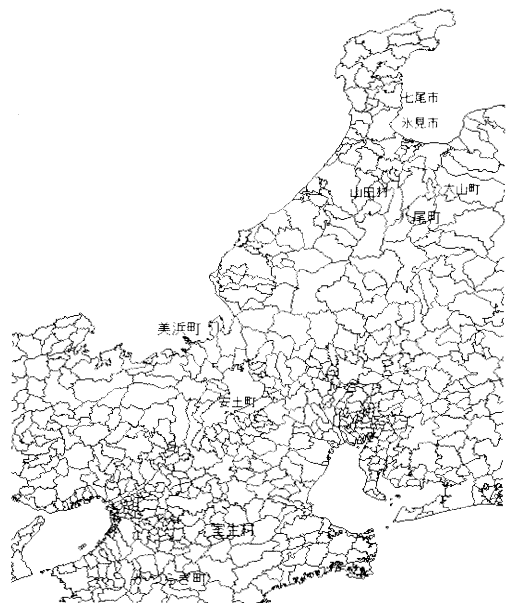


図1 調査地域

小坂に集まる。かつては奥の山まで4kmに40軒があった。小坂の神明社は、田を作っている百姓多数で近年修理された。

一方東砺波郡城端町是安にある級長戸辺神社^{しんがとへ}での風祭は、7月15日とその前夜の二日にわたって行われ、100余人が集まる大きな祭りである。また、7月14日から16日までの級長戸辺神社の風祭が「不吹堂の祭り」で、15日が「不吹堂盆」であるという（富山県祭礼研究会，1991）。宮司の祝詞、農協長の五穀豊穣祈願の祭詞奏上、参詣者の玉串奉奠、四人の巫女の舞、詩吟の朗唱、箏曲の奉納があり、その後には直会となる。かつては旅役者の芝居もあり、奉納相撲もあった。級長戸辺神社は氏子ではなくフェーンの顕著な地域の崇敬者により支えられている（富山県祭礼研究会，1991）。

すなわち下双嶺と是安では規模こそ異なるが、神社の氏子だけでなく、さまざまな人々が集まる場所に、風祭の特色がある。

ところで、砺波平野南部から富山平野南部の不吹堂が分布する地域では、不吹堂や神社境内の入口付近に一对の立石がみられることが多い（図2）。また中新川郡上市町の大岩方面にもみられ、さらに下新川郡宇奈月町中ノ口の石動彦神社^{いずるきつこ}や、同町明日の八幡社などでも同様で、立石は黒部川扇状地の山麓部に続いている（田上善夫，2000b）。

また平野部においても、婦負郡婦中町中名にある稚児舞で知られる熊野神社に、大きな立石一对がある。同町麦島の諏訪社は、明治20年に新築されて明治28年に八幡社とともに祀られたといわれるが、立石があり、別に狛犬がある。富山市でも水橋付近に立石がみられる。

富山県の西部では立石は少ないようである。しかし氷見市女良の海岸から50mほど内陸側に入ったところにある中田の道神社には、鳥居前に大石が配されている（図3）。この道神社の祭神は猿田彦神であるが、境内には諏訪社が鎮座し、健御名方命が祭られており、8月26日が諏訪祭である。諏訪との結びつき的一方、石動山の遺構をとりいれ、修験とも縁が深い。

こうした立石は呉東に特有のものといわれ、神社建築以前の聖域を示すものであろうと推定されている（伊藤曙覧，1987）。この立石が見られる

ところは、また不吹堂や諏訪神社などもみられる。ただし、立石とそれらの結びつきは明らかでない。

なお中田よりさらに内陸側で石動山の登り口に近しい氷見市長坂の長坂神社では、風神祭が8月31日に行われる。また氷見では、御諏訪まつりや鎌まつりを、風の盆として踊るといふ（友尾 豊，1998）。

2. 石川県の風祭りと薙鎌

宝達丘陵の北端に位置する七尾市江泊町日室の諏訪神社では（図4）、風鎮祭のときに打ち込まれた神鎌がみられる。この神鎌は打たれる前に、七尾市山王の大地主神社^{おおとこめし}で入魂式が行われる。平成12年にも、8月25日午前11時から斎行された（図5）。入魂式の神事が終わると、直会となる。この後、日室に車で運ばれる。

大地主神社は地元では山王さんとよばれるように、日吉大社などと同様に大山咋命^{おほやまくひのみこと}を祀るが、その境内に鍛冶神社があり、天目一命^{あめのまひとつのみこと}が祀られる。鍛冶屋の神であるとともに、ふいごとつながる順風の神でもある。神鎌の入魂式を行うのは、この神に由来するのかもしれない。

入魂式の翌々日の8月27日に、日室で風鎮祭が行われる。この日、諏訪神社の麓では大きな日の丸が2本、交叉して立てられる。七尾で入魂されて運ばれてきた神鎌のついた玉串が、五輪塔前に奉安される（図6）。

この玉串は100mほど谷の上流まで運ばれ、参加する人達が従って、お宮のある海拔95mの山頂まで約50mを登る。神職は先にお宮に向かっている。

風鎮祭は午前11時に始められる。御神酒、御贄のするめが供えられている。丈余四方の拝殿の中には、神職と氏子の人達など数人が上がる。そのほかに20名ほどの参加者がある。平成12年の場合は祭り当日は日曜日であったが、ふだんの年には幼稚園の子達も参加するという。

まず神楽太鼓が打たれ、祝詞の奏上や玉串の奉奠が行われる。神事が一通り進むと神主が拝殿前に出て、湯釜の神事を行う（図7）。この日室の湯立て神事は、湯のしぶきで風を鎮めるためのものといわれる（近藤信義，1997）。

その後に鎌が打たれる（図8）。鎌を打ちおわ

ると、祭りが終わり、拝殿と周囲を清掃した後には下山する。

日室の神鎌には、魚の絵が彫られている。日室は狭い谷間にあるが、かつて塩田が山側にあったという。海岸からは2 kmの距離であり、日室からも漁に出た。

現在の日室の民家は4軒であるが、かつては17軒あった。お宮の拝殿を作る前には山の上も広く、祭りのときに相撲をとったり、盆踊りが行われた。以前には多くのところでこうした祭りが行われていたが、盆踊りもしないところが多くなったとのことである。神職は明治から参加するようになったといわれる。村社である白鳥の神社の宮司が来る。

なお、戦争中の金属供出のときにも、ここの鎌はきたという。また、鎌祭りともいわれるが、本来は風鎮祭であって、健御名方神を祀っている。興味深いことに、同神のほかには風の神がおり、健御名方神の社を作ると風の神が女神のことで怒るといわれるが、ここでは社を作った後に風が鎮まったという。

石川県鹿島郡鹿西町金丸の諏訪神社で、日室と同じ8月27日に風鎮祭が行われる。邑知瀧平野の縁にあり、5 mほどの海拔高度しかない(図4)。神殿また拝殿もなく、境内の神域の前に祭壇が置かれ、その後ろに参拝者のための奠藪と座布団が並べられる。祭壇には鎌が奉納され、その脇に社標の入った幡がかけられている(図9)。

祭りは正部谷地区が中心となって行われ、三々五々参集する人々は、数十人に達する。境内は広く、8月末は残暑の日射が厳しい。午後4時から神事がはじまると、最初に太鼓が打たれ、祝詞や玉串奉奠などが行われる。二礼二拍手一礼の後、周辺に集まる人々にも御神酒がまわされる。その後に鎌打神事に移るが、この頃には厳粛な雰囲気から一変し、大変賑やかになる。鎌を神木にあてて打ち込む(図10)。

鎌打ちが終わるとその後には直会となるが、散会していったん引き上げる人達もいる。夕方からは盆踊りやカラオケ大会が催される。

能登では日室や金丸のほかにも風祭が多く、鹿島郡中島町では8月下旬、二百十日、二百二十日の頃に、菅忍比咩神社などで行われる。大正頃に

は一般農家でも大風が吹かないように祈ったという。同町西谷内の服狭雄神社の素戔嗚神、同町上島町の諏訪神も風鎮めの神として知られている(中島町史編纂専門委員会, 1995)。

また石川県では加賀地方でも強風にまつわる言い伝えは多い。能美郡中海村字原は、仏御前の隠遁の地と伝えられて仏の原ともいい、原風という特有の風が吹くという。「回国雑記」、「三州奇談」、「加賀名跡志」にも記され、出産の際に産室の戸を開けると悪風が起きて近郷の作物を荒らすとされている(早川孝太郎, 1938)。

3. 福井県の風祭の奉納行事

福井県三方郡美浜町は、地形的に強風が吹きやすく、また独特の風鎮行事がみられる(図11, 12)。

同町宮代の彌美神社は、延喜式では耳明神とされ、嘉禄二(1226)年より二十八所宮の名になり、明治2年より現在のものになった。二十八所には龍田・広瀬の神も含まれる(福井新聞社百科事典刊行委員会編, 1991)。

8月20日にこの彌々神社での能祭で、風祈能が奉納される。そこでは、台風より作物を守り五穀豊穡が祈られる。中世以来の伝統をもち、三方町気山などに猿楽4座があったといわれる(福井県神社庁, 1994)。

境内の拝殿手前、階段下のところにある能舞台は、2間四方の大きさである。風祈能は、彌々神社奉賛会の主催、若州藩相続倉座の後援により行われる。平成12年には、倉座の30人ほどの人たちにより演じられた。また、10数人の参加者があった。

12時過に始められ、鼓、鞆鼓、太鼓、だして囃される中、3時間余りをかけて演じられた。これは、福井県の無形文化財に指定されている(図13)。これら奉納される能は、毎年番組が変わる。神主さんによれば、祭りは能楽祭と呼ばれ、江戸時代から行われている。ただし、この付近では風がとくに強いというわけではないという。

小浜線気山駅の北西500mほどの三方郡三方町気山字宮本に、式内社の宇波西神社が鎮座する。ここでは彌々神社より1日早く、8月19日の秋祭りに風祈能が倉座能の会により奉納される(三方町史編集委員会, 1990)。「風除け能」とも呼び、



図2 不吹堂の入口に配置された立石

富山県上新川郡大沢野町下伏。神通川左岸の標高260mの山上にある。こうした立石は山麓部のみならず、この下伏や婦負郡山田村鍋谷などのように、小高い山上や中山間地の谷などにもみられる。



図3 呉西の海岸部での立石

富山県氷見市中田の道神社。拝殿は明治初めに石動山修験が衰退したおりに、天平寺開山堂を買い受けて移築された。また湯立釜も石動山梅宮での湯立神事の際に、湯を笹の葉でふりかけ無病息災を祈るときに使われたものである。他にも石橋など天平寺の遺構がある。

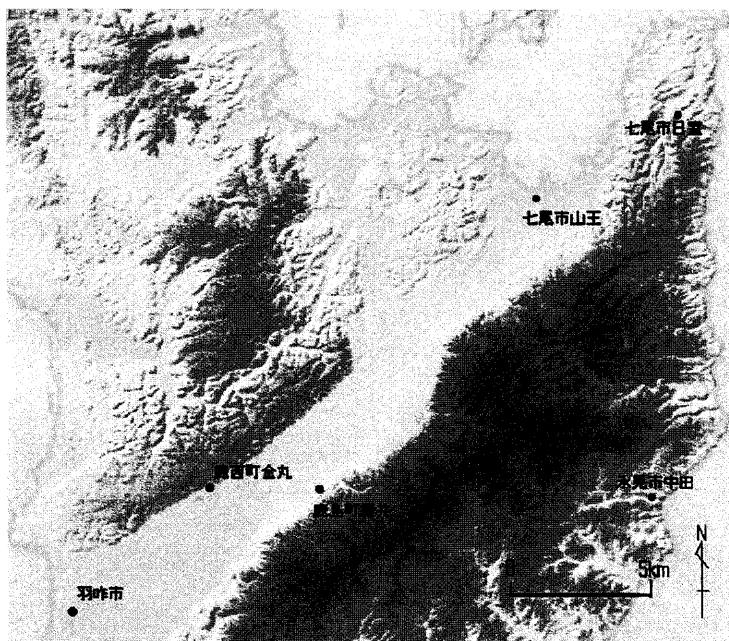


図4 能登半島南部の風鎮行事

富山県の氷見から宝達丘陵を越えた石川県の邑知潟平野山麓部にも、多くの風鎮行事が分布している。邑知潟平野に沿って山麓部などに多くみられる。

国土地理院の数値地図 50m メッシュ(標高)より、日本地図センターの Bird's View Pro(50/250)を使って作成。図11、図19も同様。



図5 日室の神鎌の入魂式

石川県七尾市山王町の大地主神社で、入魂式が行われる。魚の絵の彫られた神鎌が櫛に御幣とともにつけられて玉串とされる。



図6 日室の五輪塔前に奉安された神鎌

石川県七尾市江泊町日室の集落の中ほどにあたり、作十郎の堂の跡という。この地区には神社は多いが、寺が少ない。なお、この五輪塔は卒塔婆であるという。



図7 日室の風鎮祭での湯立ての神事

太い枝を組み合わせた上に鉄釜を乗せて、あらかじめ湯が沸かされる。湯の中にすすきの束を浸し、神域の後方と神域の方向に向けて祓う。



図8 日室の神木への鎌打ち

日室の拝殿北側のタブに、新しい鎌が鉋の背で打ち込まれる。背丈よりやや上の高さに右奥の木、左奥の木の順に打つ。



図9 金丸の風鎮祭で奉納された二丁の鎌

石川県鹿島郡鹿西町金丸の鎌宮諏訪神社。鎌には後ろ側に突起が出、稲穂がつけられている。野菜や果物、米などの農作物と共に奉納される。

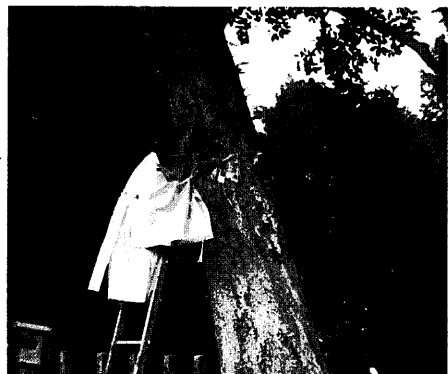


図10 金丸の神木への鎌打ち

神木にはしごをかけて上り、注連縄を新しいものに交換する。鎌の後部を神木にあて、通常のハンマーを使って十数回打ち込む

二百十日の厄日が無事であることを祈る。例年には、彌々神社と同じ倉座により同じ番組で奉納される。

ただし、2000年には風祈能が行われなかった。1999年8月14日にこの一帯で大雨があって、宇和西神社のやや小さめの能楽堂も水害を受けたためである。またこのとき付近の旅館でも水が濁ったために、1週間休んだという。

彌々神社の南方の美浜町野口に、風天大権現が祀られる(図14)。耳川の開口部にあたり、この付近ではふだんから風が強く、さらに下流の平野部まで強いが、被害はないという。また、このあたりでは火の神も祭られる。

この風天大権現では、かつては7月24日の祭りに、村人たちが手に手にタイマツをともして、大きな声で「シシマメクワンヨウニ(猪豆喰わんように)」と唱えながら詣ったという(斎藤楓堂, 1981)。さらに「狼小豆くわんよう」ともいわれた。

また野口の南方、美浜町新庄の日吉神社では、八朔祭に風除けの祈禱が行われた。八朔祭はどぶろく祭りともいわれ、大酒樽が道行きをし、それにあたって天狗が暴れる。これは良い子が生まれたり、豊年満作の祈願と考えられている(小林一男, 1979)。その八朔音頭では「二百十日に風さえ吹かにか、まずはとりおき箕ではかる」と歌われる(美浜町教育委員会, 1990)。このように、風鎮の行事は耳川上流部まで連なる。

一方海岸部においても、日向湖と久々子湖に挟まれた笹田に風宮神社がある(図15)。この風宮神社は風大神を祀り、3月16日が例祭である。伊勢の外宮の風宮が勧請されたといわれる。明治42年に前記の宇波西神社に境内社の山神社・神明社とともに合祀されたが、後年区民の願望により元の地に分離奉斎され、昭和61年には有志により鳥居が奉納された。祝部制度により神社が護持されている(福井県神社庁, 1994)。なお、宇和西神社には23の神社の祭神が合祀されたが、その後の集落での運動で氏神が復旧したものに、海山区の熊野神社、塩坂越区の八幡神社、遊子区の廣嶺神社などがある(三方町史編集委員会, 1990)。

ききとりでは、このあたりでは風祭はあまりないが、風は強くて一帯を吹き抜けるという。春にはむしろ火祭りが盛大におこなわれる。

福井県ではこの三方地方に限らず、二百十日前後に大風が吹かないように祈る風祭が各地で行われる(表1)。敦賀市では二百十日前に風祭をして、風除け祈願をする。大飯郡高浜町では、二百十日前祈念の行事が各地で行われる。

IV 北陸周辺での風鎮行事

1. 近畿地方での風鎮にまつわる鎌

さまざまな風鎮にまつわる行事は、北陸のみならず近畿でもみられる。七尾や鹿島などでの風鎮

表1 福井県の風鎮行事

地名	行事	内容	出典
福井市門山	9月11日に風祭	ムラの神社に地区の人が集まり、御神酒・スルメで祝う	1)
福井市木田	9月1日に風祭	農事をカタヤスミとする	1)
丹生郡越前町海浦	大風後に風祭	大風や大火災後は山伏を招いて祈禱	2)
敦賀市中村	厄日の3、4日前に参籠	各戸の主人が氏神に背から参籠し、カガリ火をたいて夜を明かす	3)
敦賀市原	8月20日ごろに風祭	区内の老若男女が夕刻~12時頃迄宮ごもりし、お灯明をあげる	3)
敦賀市松島	8月23日に風除祭り	昔は踊りもたった	3)
大飯郡高浜町関谷	8月24日に桂不動で祈願	二百十日の無事を祈り、夜は公民館にてお講をひらく	4)
大飯郡高浜町六路谷	安全祈願	災害を受けないよう、お千度参りの安全祈願を行う	4)
大飯郡高浜町小和田	神社で祈念	神社に区民が集まり、般若心経十三巻を読みあげ、祈念する	4)
大飯郡高浜町日引	16日にお宮で祝詞	全員がお宮に参って祝詞をあげる	4)
大飯郡高浜町鎌倉	杉森神社で祈念	台風の季節を迎え、般若心経をあげて祈念する	4)
福井県	稲の花が咲くころ	風除けの祈禱をしたり、五百灯や千灯をあげて盆踊りをする	5)

1) 福井市(1988), 2) 越前町史編集委員会(1987), 3) 斎藤楓堂編(1960), 4) 高浜町(1985),

5) 福井新聞社百科事典刊行委員会編(1991)

祭では鎌打ちがおこなわれるが、鎌を神体ないしは神具とする神社は各地に存在する。

滋賀県蒲生郡安土町の老蘇^{おいそ}森は、琵琶湖岸の安土城跡に程近く、やや内陸寄りに入ったところにある。至近を国道8号と新幹線が走るが、往時は現在の数倍の規模があり、中山道の名所として旅行者が訪れたという。ここに天兒屋根命^{あまのこやねのみこと}を祀る、式内社の奥石神社^{おくいし}があり、その紋である鎌が境内にみられる(図16)。境内には諏訪大明神があり、健御名方富命^{たけみかたのみこと}が祀られている。諏訪大明神では8月26日に諏訪宮宵宮祭が行われ、さらに本社ではその翌日の8月27日が夏季例祭で、湯立ての神事が行われる。

奥石神社の南西1kmほどの同町西老蘇に鎌若宮神社がある。こども鎌宮さんと呼ばれ、奥石神社の分家といわれる。大己貴大神^{おほおみ}が祀られ、境内に四季神社がある。9月9日に宵日待祭が行われる。この鎌宮神社では、三月初申の日に氏子が鎌を献納したという(柳田國男, 1931)。

こうした鎌は、さらに近畿地方の中央部にもみられる(図17)。奈良県生駒郡斑鳩町の法隆寺の五重塔には、鎌がさされている(図18)。

この鎌の由来には、これまでに諸説がある。まず、鎌は塔を台風や落雷から守るための民俗信仰で、風を切る願いを表す呪術であり、風の神の加護を求めたという(中西 寛・土井 実, 1967)。

創建当時ではなく、中世に風を鎌が切ってその力を弱めるという信仰にもとづいて、鎌が懸けられた(市川健夫, 1999)。この風切鎌は五行にもとづいており、金気である鎌により伸縮するゆえに木気である風を剋殺するとして持統朝の名残といわれる(吉野裕子, 1987)。

ききとりでは、こうした鎌は周囲でもここだけにみられる、建立時からある魔除けと捉えられている。鎌を用いる意味として、また雷災除けともいわれるが、むしろ雷を呼ぶかもしれないという。むしろ、鎌を上げ下げして周辺地区の農民に豊年を知らせたという。風災との関係がいわれる中で、豊穡祈願との結びつきが考えられる。また、この鎌の形は、近畿地方で一般に使われるものとは少々異なっているようである。

この法隆寺の南西1kmほどのところに、龍田

神社がある。この龍田新宮は聖徳太子が法隆寺建立の際に、龍田明神が老爺に化して伽藍の勝地を教え守護神にならんとした神託があったが、鎮座する立野までは遠いので、ここに勧請して法隆寺の鎮守として祀ったという(岩井宏實, 1972)。現在も、天御柱命・國御柱命、龍田比古大神・龍田比女大神を祀る。由緒書では、法隆寺の鬼門除神として、また地域の産土神として祀られたという。祀られている諸神は風神であり、7月4日に風鎮祭が行われる。そのため法隆寺五重塔の鎌が風にまつわるものであれば、多くの鎌が諏訪神との関わりが強い中で、龍田神との関わりも無視できなくなる。

和歌山県北部を紀ノ川が東西に流れる(図19)。伊都郡かつらぎ町兄井に、鎌八幡がある。紀ノ川の左岸にあり、川を見下ろす比高50mほどの北向きの緩斜面上である。隣接して諏訪神社が祀られている。打ち込まれたうち1本が大きく、地上4m以上にあるのは7本である。とくに造作のない細身の鎌には、小さく「零弘」の銘が認められる(図20)。

この鎌宮は三谷に合社されていたが、正遷宮^{しょうせんぐう}で平成7年に移ってきたという。祭りはまた兄井の60軒の部落で行われる。神主さんは三谷の諏訪神社から来る。祭りのときに、木にコンコンと鎌を打つ。昔の木は枯れたため別の木であり、鎌も昔は柄のついた大きなものであった。また祭りのときには餅が撒かれるという。

兄井の東の三谷には丹生酒殿神社^{にぶきさか}があり、健御名方命も祀られている。7月15日が夏季大祭である。また、境内には鎌八幡宮があり、ここには菅田別命^{すがた}が祭られている。対岸の紀ノ川右岸の妙寺にある八太神社^{やったい}は、かつては一丁四方の八幡の森で、神が御神体であったという。

兄井、三谷、妙寺にみられるように、この地域では鎌や森は八幡にまつわっている。同時に諏訪社・諏訪神も隣接しており、関係を複雑にしている。

2. 近畿の風籠・風日待の行事

滋賀県南部の山村では、二百十日または二百二十日に関連して八朔に氏神の社に参籠し、暴風の

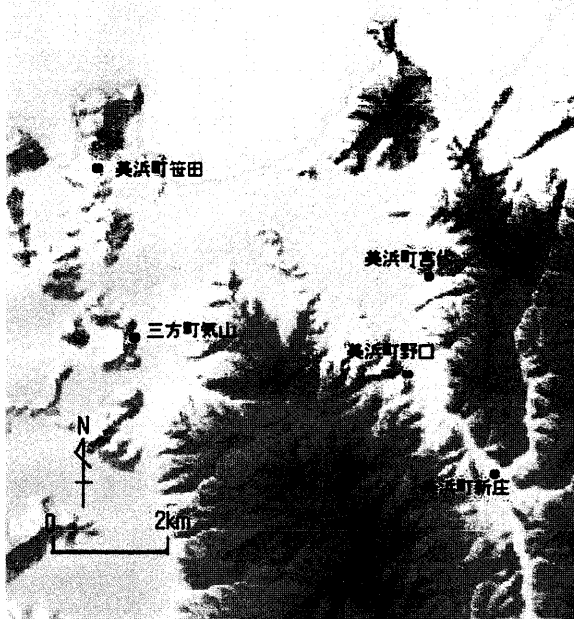


図 11 美浜周辺の風鎮行事の行われる地域

福井県三方郡美浜町では、耳川が南東から北西に流れる。嶺南地方では南側に山地を控え、南北に伸びる低地に沿って南の強風が吹きやすい。この平野部東側の山麓に神社が続く。

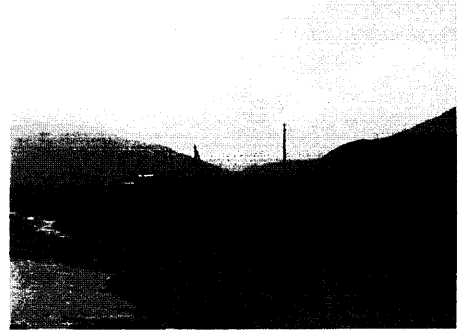


図 12 三方郡美浜町南市付近

美浜町市街地の南方で、耳川の扇状地の扇端寄りである。前方に耳川の開口部をのぞむ。

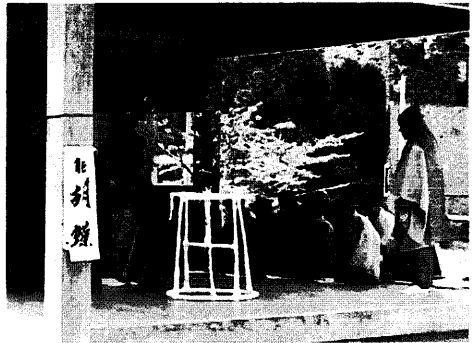


図 13 神社での風折能の奉納

福井県三方郡美浜町宮代の彌々神社。若州藩相続倉座の人達により、能の一人扇、さらに半能の高砂、仕舞の百萬や、胡蝶、金札、猩猩の能が演じられる。



図 15 海岸付近に祀られる風大神

福井県三方郡美浜町笹田の風宮神社。レインボーラインの入口から 100m くらい先の左手、高度 100m 程のところ鎮座する。鳥居に風宮の社標の入った扁額が掲げられ、地元では風宮さんと呼ばれている。



図 14 強風地域での石碑

福井県三方郡美浜町野口の集落南方の、高度 50m ほどの愛宕山頂上に、二つの石碑が祀られている。左側の石碑には「風天大権現」と彫られている。右の石碑の銘は不明である。この風天さんの祭りには、部落 2 軒づつが交代で 3 回参る。

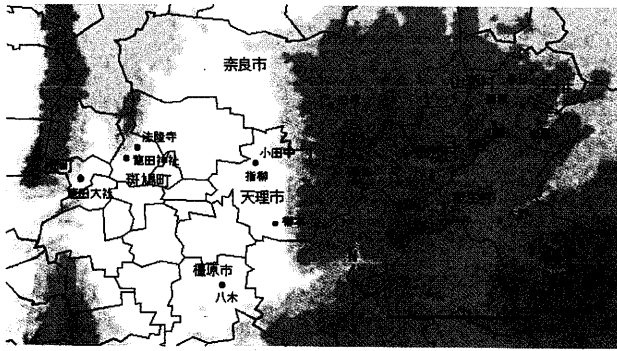


図 17 奈良盆地周辺の風鎮行事の行われる地域

風鎮行事は、奈良盆地の東にある山地の宇陀郡室生村、山辺郡都祁村、山辺郡山添村などで多くみられる。国土地理院の数値地図 250m メッシュ(標高)より、ESRI 社の ArcView GIS で作成。

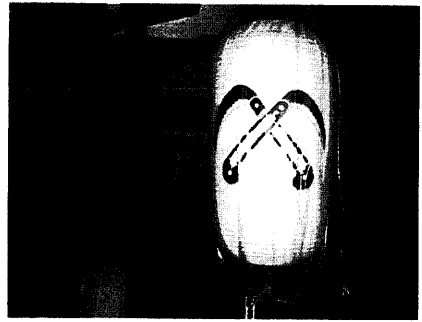


図 16 鎌の紋をつけた提灯

滋賀県蒲生郡安土町東老蘇の奥石神社。鎌宮さんとよばれており、神楽殿の提灯や後方の本殿の幕にも、鎌の紋が描かれている。図 1 参照。



図 18 五重塔の九輪につけられた鎌

奈良県生駒郡斑鳩町の法隆寺。稲刈り用の鎌より大型のものが、初重より屋根の四隅の方向に向けて取り付けられている。

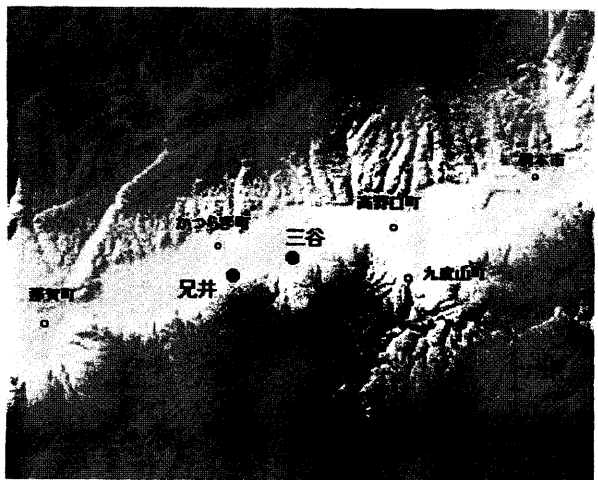


図 19 紀ノ川沿いにみられる鎌祭り行事の地域

和歌山県伊都郡周辺。すぐ南方は高野山で、その上り口付近。



図 20 紀ノ川沿いでの鎌

和歌山県伊都郡かつらぎ町兄井の鎌八幡宮。幹に鎌の刃先から直角に打ちこまれている。境内にある木の幹の 1.5m~5m のところに、北向きの谷側を中心に 34 本が数えられる。



図 21 内陸地域の強風の被害

奈良県宇陀郡室生村室生の室生寺。斜面上部のやや低まったところに続いて境内の平坦地があり、ここを強風が吹き抜けた際に杉の巨木が倒れかかって五重塔が被害を受けた。

害を免れるよう祈る。風籠かごこもりとよばれ、旧8月前半の農閑の休日を意味する（柳田國男，1934）。同様の風鎮行事は、奈良盆地周辺などでも多数みられる（図17，表2）。こうした宮に籠り風鎮を祈願するのは氏子の人達であり、その規模は小さい。また僧侶が齋行したり、一同で経文をとなえたりし、神仏ならびに修験が関わる様相がみられる。

北陸の強風地域は沿岸平野であったが、近畿地方中央の盆地部や山間部でも、強風による被害は変わらない。奈良盆地の東方の室生村にある室生寺の五重塔は先の台風により被害を受けた（図21）。

現在は修復されているが、倒木の巨大な根株がいくつも残されている。その南西側は断崖になっている。断崖下から見ると谷底はやや広まっており、川が曲流して一番奥まった斜面の上方を吹き抜けて、杉の巨木を倒し、さらに五重塔に倒れかかったようである。

3. 龍田大社の風鎮祭

龍田大社の風鎮祭は大室令に出ている最古の祭りの一つである。明治初年に風神祭から現在の名に改められ、4月4日と7月4日の祭日のうち前

表2 奈良盆地周辺の風鎮行事

地名	行事	内容	出典
旧大和高市郡八木町*1	二百五日に風日待	町ごとに当番の家が早朝から竹藪で竹を切り、門先に作った簡単な拝所の四方を竹で飾り、中央に長さ3尺、幅1尺ほどの、多くは「天照大神」と書かれた掛け軸を掛ける。その前に野のもの山のもの等を供える。大提灯を2個4個6個と両側に出し、夜は火を點す。	1)
旧磯城郡柳本町大字柳本*2	8月22日に伊射奈岐神社で風鎮祭	風鎮祭の祭典後に、大字の肝煎が榊の幣を町の中央および四角に一本ずつ立てる。	2)
旧磯城郡柳本町大字渋谷*2	8月20日に水口神社で風鎮祭	午後4時から風鎮祭をし、午後5時から子供連れで境内の菰や筵に座り、かがり火の下で弁当を開いて午後9時半頃までお籠りをする。	2)
天理市小田中、指柳	9月1日に神社で籠り	風の平安を祈って、夕に本殿に家ごとの提灯を吊るし、境内に筵を敷き弁当をひらいて籠りをする。	3)
天理市福住南田	8月20日に風の祈禱	宮でこうりとりをし、午後は寺でひおくりをする。	3)
奈良市田原日笠	天満神社で祈願	神殿と拝殿の間に榊を立て、その周囲を笹をもって、デンデコデンといいながら回り、風難を押さえる祈願を込める。	4)
宇陀郡室生村大野	8月1日に海神社でおこりとり、風鎮祭	午前4時頃から鳥居前の宮川の水を手桶に2杯汲む。葉が33枚ついた榊の枝をこの桶で洗い、100m離れた拝殿前で祈願をして葉を1枚置く。戻って葉を洗い再び参拝し、計33回繰り返す。その後風鎮祭が齋行された後、枝は持ち帰られて、田に差し立てられる。	5)
山辺郡都祁村白石	8月～9月に宮で籠り(風の祈禱)	かけ籠り(田植終り)、一夜籠り(風の祈禱)、8月30日～9月1日に二夜三日の籠り、9月12日のかいと籠りが行われる。	3)
山辺郡山添村切幡	8月18日に氏神で風の祈禱、9月1日に日おくり	1戸から1人が氏神に参拝する。その後拝殿前に10m間隔で50cmほどの榊を2本立て、左側の榊の回りを神主を先頭に参拝者全員が「一万度ウーイ」と唱えながら数十度回り、続いて右側を回る。その後、御神酒と御供えをいただく。日おくりには1戸から1人が出て、早朝から1日中参籠所に籠る。	6)
山辺郡山添村岩屋	8月28日に八柱神社で二百十日厄除祈願	村のお年寄りを導師に、大峰山開祖の行者勸進経を唱える。堂下二人は村酒2本と出し豆、清酒やパンのお供えを出し、また堂下の晴による煮しめで参加者は接待を受ける。	6)
山辺郡山添村春日	8月21日に風雨順和の祈禱	区長の主催で大人(60歳以上)が参列し、大字安全、風雨順和、五穀豊穡が祈願される。上座から榊の枝が渡され、葉を一枚ずつ取り半分は破り、身体を清めて後に捨て次の者に回す。その後神宮の導師で般若心経を10回唱和する。青竹を半分に割り内側に半紙を貼り、住僧により「奉読誦般若心経大字中安全風雨順和五穀成就祈攸」の御符を7つ作り、内6個を各小字農道の要所に立てる。	6)
山辺郡山添村下津	8月23日に吉備津神社で風の祈禱	河内川のほとりて石を12ヶ拾って洗い清めて境内に並べ、12ヶ月の無事平穏と豊年満作を願う。神事の後直会があり、半日のお籠りをする。	6)
山辺郡山添村中之庄	9月1日に八幡神社でお祓いや暴風雨の平穏無事祈願	各戸1人ずつが村の鎮守の八幡神社に集まり、お祓いを受け、暴風雨の平穏無事や五穀豊穡、家内安全や区民の益々の発展を祈願する。その後会所で御神酒と持参のご馳走をいただく。	6)
山辺郡山添村勝原	8月28日に祈願	各戸1人が出て参拝の後、神主が祭主となり大老の年頭が日輪(太陽)さんに向かって榊の葉を120枚かざし、一同で「おがにゃそばか」と唱える中、葉を1枚ずつ落とす。お宮で大日如来様に光明真言を唱え、御神酒や赤飯をいただく。	6)
山辺郡山添村三ヶ谷	8月18日に風害を受けぬよう祈禱	男子老人全員が神社に集い、家屋や耕地、農作物が風害を受けぬよう祈禱する。神事の後御神酒と粗肴をいただく。	6)

*1 橿原市、*2 天理市、1) 島本一(1933)、2) 辻本好孝(1944)、3) 奈良県史編集委員会(1986)、4) 中西寛・土井実(1967)、5) 奈良県祭礼研究会(1992)、6) 山添村年中行事編集委員会(1993)

者は例祭とされ、7月のみを風鎮祭として7月第1日曜までの7日間行われる。また、半夏生^{はんげしよ}とも呼ばれる。風神を祀る本社である龍田大社での、現在の風鎮行事の概要をまとめると、以下のようである。

最終日の大祭は午前10時30分から始まる。天御柱命には盾、矛、祈雨あるいは止雨のための絵馬(2頭の馬の置物)、国御柱命には養蚕に用いる木製のたたり、かせひ、桶、絵馬が供えられる。宮司の祝詞奏上に続き献幣使(勅使)の祭詞が奏上される。続いて竜田神楽が、三郷町立野字坂根にある巫女の坂本家の母娘により、舞い歌われる。神の呼び出し、このや乙女、すめ神、めづらしな、千代まで、君が代、都人の順であるが、神前の舞、剣の舞、鈴の舞ともいわれる。剣舞は魔を切る意味を込めて2本の小刀で空を切る。さらに詩舞、柳生新陰流の居合がある。

正午に祭典が終わって風神太鼓が奉納される。さらにお湯焚をし、青い楓の幣が奉げられる。午後は神賑行事が行われ、伊勢太神楽講社による獅子舞が奉納される。後に河内音頭の盆踊りがされ、風神火花があげられる。

翌日には御幣を奉じて御座峰に登り、御座峰山神祭が行われる。風神祭が無事斉行された報賽の祭りがあがり、振幣された後に御幣が同所に1年間安置される(中西 寛・土井 実, 1967; 奈良新聞出版センター, 1969; 岩井宏實, 1972; 奈良県祭礼研究会, 1992; 奈良新聞, 1996)。

このように同社における風鎮祭は、奈良盆地東方の山地でみられるものとは異なり、多彩な奉納芸能を伴っている。数々の芸能は、個々の風鎮祭でもみられたものも多いが、ここではそうした要素が多数集合している。

V 風鎮行事の由来の検討

1. 富山の風の神とその変容

富山県において、風祭・風の盆とよばれる風鎮行事がみられることは、前述のとおりである。風の神は、井波風、神通風、桐谷風などの風の強い地域で「九万堂」「不吹堂」という祠をたてて祀られる。フカンドウ神は風の吹く時だけ、所定の

位置に降り立って遮断神となったが、やがてせきとめるべき風の神に習合した。もともと富山では、古い社においても所伝と特有の祭祀儀礼を持たないものが多く、畿内文化の影響、古代仏教の影響、さらに石動山・医王山・牛嶽系修験道の習合的介入による変化を受けたとみられている(能坂利雄, 1974)。

ところで富山では、現在の神社は、神明宮、八幡宮、諏訪社のような特定の名社に集中する傾向がみられる(田上善夫, 2000b)。それらの中で八幡社は、国府や国分寺、東大寺荘園の所在地などに多く、婦負郡婦中町では、中世に開かれて多くの武士の割拠した地域に勧請されたようすがみられる。つぎに神明社は、江戸時代に広く勧請されて、新開地の村々に多く祀られる。これは、古くは伊勢神宮の奉幣が禁じられたのに対し、中世には宮中からの奉献が薄くなる中、御師という下級の神官を各地に派遣してお札を配ったり参宮をよびかけて伊勢信仰が広まったことによる(婦中町史編纂委員会, 1996)。また、新川地方としても、八幡系より伊勢系の神明社が多いのは、氾濫により開墾が新しいせいもある(能坂利雄, 1974)。

このように富山の自然条件にもとづいて開発が進められていく中で、祈願の対象に応じ、また時代背景に応じた諸神が勧請されてきた。風神もまた同様の影響を受けたと考えられる。ただし婦中町では諏訪社は神通川沿いに多く、養田の良水を祈願するための用水の神として勧請されたことを示している(婦中町史編纂委員会, 1996)。このように平野部では、諏訪社は風よりも水の神として捉えられており、山麓に多い不吹堂などの神とは、やや異なっている。

2. 風鎮の鎌と諏訪信仰

前述のように、北陸や近畿で風鎮に関して鎌が用いられる例がある。能登以外でも富山県では、強風のときに鎌を竹ざおにつけてあげる風習が、朝日町、黒部市、滑川市などでみられた。こうした鎌に関する風習は、宮城県、新潟県、群馬県、神奈川県、山梨県、静岡県、愛知県、滋賀県、岡山県、愛媛県、宮崎県など、全国各地にみられる(田上善夫, 2000b)。既報のものに若干補足する

(表3)。

表3 鎌を用いる風習

地名	行 事	出典
秋田県仙北郡六郷町	鎮守の諏訪神社に祭りの日に木で作った鎌を奉納する	2)
秋田県仙北郡大曲町	諏訪社八月の祭りで、行列の先頭に鎌を持って進む。雷鳴の日に軒に鎌を立てる。	2)
原町市	風の強い日は鎌を竿の先につけて立て、風足を切る	1)
相馬市岩の子	二百十日に竿の先に鎌をつけて高く吊るす	1)
福島県石川郡浅川町	二百十日の嵐除けに集落の上下の木に風袋(風の二郎)様をかけ、災厄をもたらす風を鎌で切り払う	1)
福井県越前町、高浜町	鎌とほうきを戸外にたてて、風切りのまじないとした	3)
飛騨	暴風を鎌風といい、戸を閉じて窓から鎌を出しておく。関東・中部地方でのカマイタチと同様の信仰。	4)
飛騨の高根村ヶ洞	道後神社に、往古奉納された鎌と鍬がある	2)
三河	猿投山神社で、鎌を納める	2)
大阪府珠庵	契沖法師の墓の近くの鎌八幡で鎌を大木に数多く打ち込む	2)
熊本県佐敷	諏訪神社で神体は鎌に移り座す	2)

1) 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄(1999), 2) 柳田國男(1931), 3) 福井新聞社百科事典刊行委員会編(1991), 4) 石上 堅(1983)

これらには、諏訪神社がかかわることが多く、風鎮に鎌が使用されることの主たる説明は、諏訪信仰に求められている。ただし風祭りに諏訪信仰が加わって鎌を立てるのは、江戸中期以降といわれる(桐原 健, 1977)。もともと諏訪神社の雑鎌は室町までは祭具の一つに過ぎなかったが、江戸時代には鎌が神幣とされ、上社の神輿の上に立てられ、下社からは御柱の前年に雑鎌が遣わされるようになる。こうした諏訪の雑鎌の起源は、古代の鎌ではない。

一方、前述の法隆寺では、その創建に際して「鉞鎌」が使われた。開墾のための鉞鎌は、弥生中期以降に現れ、奈良時代頃までは専ら実用に供された。鎌倉時代頃から開拓神としての信仰と結びついて雑鎌となったと考えられている(藤森栄一, 1962)。そのため両者の鎌は、形態を異にしている。

また、長野県北安曇郡小谷村の戸土(遠戸)の境の宮では、七年に一度鎌が打ち込まれる。信州の国境の確認といわれるが、信州以外でも鎌が打たれたり、祭りで鎌が奉納されており(表3)、

諏訪明神への畏敬を示している(柳田國男, 1931)。同様にして全国各地でみられる鎌は、諏訪との由縁を示すと同時に、その風鎮祈願と深く結びつくものと考えられる。

3. 集落や家内などでの風鎮行事

北陸や近畿では前述のように、風鎮のためのさまざまな行事が行われ、芸能の奉納を伴う場合もみられる(表1, 2)。ただし、風日待ちや風籠りのように、集落などで行われる小規模なものも多い。

またその他の地方でも、家内においての風鎮行事が多くみられる。福島県の原町市では、二百十日を荒日といって日待ちをし、荒日除けに豆(小豆)御飯を炊く。相馬市でも二百十日は厄日で赤飯を炊いた。相馬郡鹿島町では荒日待といって、午前中もち米五合を持ち寄り、まわり番で餅をつき、山津見神社の掛け軸をかけ、井戸で口をすすぎ、手を洗ってから荒れないように拝んだ(福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄, 1999)。

このように風鎮めは、北陸や近畿に限らず集落さらに家内で行われるものが多い。ただし、こうした行事の逐一を知ることは困難である。

VI おわりに

強風は稲作をはじめ、日々の暮らしにも甚大な被害をもたらすため、各地で風鎮めを祈願する祭が行われる。9月初めの二百十日をはじめ、4月や7月にも風祭が行われている。これらの多くは農業と結びついており、田植えや収穫の時期に先立つものであった。またこの「風」は、大気現象の風を示すとどまらず、世界あるいは境界を示しており、風祭は霊的な存在を介して豊作を予祝するものであった。

一方、海で暮らす人々の間では、風の神への信仰や風にまつわる地名は少ないといわれる。農村では台風は災害をもたらすものであるが、沿岸での漁は、海の荒れを忌避するだけでなく、適切な風向や風速を必要とするために、自ずと異なるものとなったのであろう。

農村のほかに、とりわけ奈良盆地の東でみられるような山村では、風祭もきわめて多様で、個々にさまざまな内容を伴っている。たとえば、家内などで、ふだんは食べないものを作ったり、酒食をともにして楽しむ。もともとは風鎮めの行事は、こうした家族により家内で行われるものであったように考えられる。

さらに集落での行事として、風鎮行事が行われるようになる。北陸や近畿でも、風の祈祷や風籠り、風日待ちなどが広く行われている。また鎌打ち神事も、集落の人達を中心にして、大変楽しみに鎌が打たれる。多く日にすることができるのは、こうした集落での共同祈願の行事としての風祭である。

比較的大きな神社では、そこで斎行される風祭にともなって、さまざまな芸能が奉納される。富山をはじめ福井でも、風祭に能や詩吟、舞などの芸能が奉納されている。龍田大社での風祭はそうしたものの中でもきわめて多様な内容を含むものの一つと考えられる。

家内にせよ大社で行われるにせよ、風鎮の祭りは人々の大きな楽しみであった。また現在は必ずしも行われていないが、かつては各地で風祭に集まった多数の人々により、「盆踊り」が行われた。おわら風の盆も、地域の不吹堂の祭りに由来しており、そうした風鎮行事のあり方と変容にあてはまるものの一つであろう。

各地の風祭には、風籠りや盆踊りなどの共通の特色がみられるとともに、鎌打ちをはじめとした特異な神事が伴う場合が多い。ただし、風祭においては、多くの祭りで行われる山鉾巡行や神輿渡御などの行事はみられない。これが本来風祭の特質に根ざすものであるのか、それとも地域的な特性であるのか、必ずしも明らかでない。さまざまな行事の由来と変容とともに、風祭そのものについて、今後明らかにすべき課題である。

謝 辞

本調査を進めるにあたり、七尾市日室では谷内清行氏、美浜町宮代では福谷喜義氏、内方叙夫氏をはじめ多くの方々からご教示いただきました。

また、大山町、鹿西町、美浜町、かつらぎ町などでの調査でも、現地の方々から、多大なご配慮をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 石上 堅 (1983) : 日本民俗語大辞典. 桜楓社, 1432p.
- 市川健夫 (1999) : 風の文化誌. 雄山閣出版, 207p.
- 伊藤曙覧 (1987) : 富山県の石の民俗. 堀川豊弘編『中部地方の石の民俗』明玄書房, 55-76.
- 岩井宏實 (1972) : 奈良祭時記. 山と溪谷, 221p.
- 宇奈月町史編纂委員会 (1969) : 宇奈月町史. 1067p.
- 漆間元三 (1974) : 新版習俗富山歳時記. 巧玄出版, 287p.
- 越前町史編纂委員会 (1987) : 越前町史下巻. 越前町, 1124p.
- 小倉 学 (1991) : 能登半島における諏訪信仰— 鎌打ち神事を中心として—. 加能民俗研究, 22, 3-30.
- 桐原 健 (1977) : 薙鎌私考. 信濃, 29(1), 74-84.
- 小林一男 (1979) : 八朔祭りの暴れ天狗. 武田久二監修『三方郡ふるさと昔話第2集』関西電力, 33p.
- 近藤信義 (1997) : 諏訪大社御柱祭の薙鎌について— 日室・戸土・金丸の祭事を追って—. 立正大学人文科学研究年報, 別冊第11号, 11-22.
- 斎藤槻堂編 (1960) : 若越民俗語彙. 福井県郷土誌懇談会, 225p.
- 斎藤槻堂 (1981) : 越前若狭の民俗事典. 越前若狭の民俗事典刊行会, 470p.
- 島本 一 (1933) : 風日待について. 旅と伝説, 6(10), p57.
- 杉谷流翠 (1936) : 風神としての天狗. 旅と伝説, 3(5), p.36.
- 高浜町 (1985) : 高浜町誌. 高浜町, 786p.
- 田上善夫 (2000a) : 富山の不吹堂の風神祭と局地風地域における風の祭祀. 富山大学教育学部紀要, 第54号, 1-13.
- 田上善夫 (2000b) : 富山県周辺における風祭と風鎌について. 富山大学教育学部研究論集, 第

- 3号, 69-82.
- 辻本好孝 (1944): 和州祭禮記. 天理時報, 460p.
- 友尾 豊 (1998): 風神信仰. 富山民俗文化研究グループ編『とやま民俗文化誌』シー・エー・ビー, 194~201.
- 富山県祭礼研究会 (1991): 祭礼事典・富山県. 桜楓社, 204p.
- 中島町史編纂専門委員会編 (1995): 中島町史資料編上巻. 中島町, 887p.
- 中西 寛・土井 実 (1967): 大和路の年中行事. 観光問題研究所, 313p.
- 奈良県祭礼研究会 (1992): 祭礼事典. 奈良県, 287p.
- 奈良県史編集委員会 (1986): 奈良県史第12巻民俗(上). 名著出版, 558p.
- 奈良新聞 (1996): 大和の神々. 奈良新聞, 177p.
- 奈良新聞出版センター (1969): 大和の年中行事. 奈良新聞出版センター, 452p.
- 能坂利雄 (1974): 祭祀の原像. 漆間元三・清原為芳編『富山の祭りと行事』巧玄出版, 247-254.
- 早川孝太郎 (1938): わたくし雨・わたくし風. 旅と伝説, 11(11), 1-8.
- 福井県神社庁 (1994): 福井県神社誌. 福井県神社庁, 898p.
- 福井市 (1988): 福井市史 資料編13 民俗. 福井市, 902p.
- 福井新聞社百科事典刊行委員会編 (1991): 福井県大百科事典. 福井新聞社, 1167p.
- 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄 (1999): 日本民俗大辞典 上. 吉川弘文館, 1008p.
- 藤森栄一 (1962): 雑鎌考-諏訪神社の考古学的研究(五)-. 信濃, 14(11), 732-743. (再掲 1986 藤森栄一全集第14巻246p. 学生社)
- 婦中町史編纂委員会 (1996): 婦中町史, 通史編. 1288p.
- 三方町史編集委員会 (1990): 三方町史. 三方町, 1290p.
- 三隅治雄 (1989): 越中おわら風の盆. 瀬戸内寂聴・藤井正雄・宮田登「仏教行事歳時記9月放生」第一法規出版, 73-85.
- 美浜町教育委員会 (1990): 美浜の民謡・わらべ歌-美浜町の民謡・わらべ歌採訪記録. 美浜町教育委員会, 93p.
- 柳田國男 (1934): 年中行事調査標目(九). 旅と伝説, 7(1), 45-60.
- 柳田國男 (1970): 御頭の木. 『定本柳田國男集第二十二巻』筑摩書房, 242-261, (初出1931郷土1(3))
- 山添村年中行事編集委員会 (1993): 年中行事. 山添村, 415p.
- 吉野裕子 (1987): 持統天皇-日本古代天皇の呪術-. 人文書院, 220p.